

役立たぬ者とふも役、こぼこぼと音たてて飲む夏の焙じ茶 梅原ひろみ『開けば入る』 2019年

【ビール】

ここはぐつとこらへどころとつがれたるビールに泡をかみくだきぬつ 保坂耕人『風塵抄』 1988年

芝生にのびし屋内の灯に動く人らの中夫をはなれきてビールのグラスとる

木尾悦子『驟雨の中の噴水』 1997年

七割を泡にして注ぐビールかな秘境に似合う牧水の歌 藤島秀憲『ミステリー』 2019年

【ウイスキー】

ウイスキーは割らずに呷<sup>あむ</sup>れ人は抱け月光は八月の裸身のために 佐佐木幸綱『呑牛』 1998年

【チューハイ】

「嫁さんになれよ」だなんてカンチューハイ二本で言ってしまったていいの

俵万智『サラダ記念日』 1987年

【酒】

いささかのよき事なして一つきの酒心地よき此のゆふべなり 佐佐木信綱『思草』 1903年

大かたはおぼろになりてわが目には白き盃一つ残れる 石樽千亦 歌集未収録

徳利の向こうは夜霧、大いなる闇よしとして秋の酒酌む 佐佐木幸綱『火を運ぶ』 1979年

南湖の量、否、海の量の酒を飲み語らむと逢ふ夕暮はよし 大口玲子『海量』 1998年

味酒<sup>うまざけ</sup>の身はふかふかと酔ひゆきて待つところなりいかなる明日も 伊藤一彦『新月の蜜』 2004年

人肌の爛とはだれの人肌か ところに立たす一人あるべし 佐佐木幸綱『百年の船』 2005年